1. 夏祭深川不動

一

旧暦４月、初夏――。

坂崎磐音は深川六間堀の金兵衛長屋で蒸し暑い日を過ごしていた。

親友二人を失った明和九年の夏から一年が経とうとしていた。

気温が上がったせいか、鰻割きの仕事は忙しかった。

磐音は毎朝七つ半に、北の橋詰の鰻屋宮戸川にかよってひたすら鰻と格闘していた。

二月ほど前、日当が七十文から百文に値上がりした。そのせいでなんとか暮らしが立っていた。だが、このところ纏まった金が入る仕事はなかった。

この朝、磐音は宮戸川の仕事の帰りに、貧乏御家人の次男坊、品川柳次郎を北割下水の拝領屋敷に尋ねた。拝領屋敷に尋ねた。

拝領屋敷といえば聞こえがいいが、何十年と手入れもされていない壊れかけた屋敷だ。それでも御家人のこと、敷地は二百坪ほどおｎ広さがあった。

この辺りの御家人の屋敷では庭を畑にして季節の野菜などを植え、家計の助けにしていた。品川家でも御多分にもれず、青菜や茄子などを栽培していた。

「坂崎さんか」

畑に水を撒いていた柳次郎が、首に巻いた手拭いで額の汗を拭きながら振り見た。

「何ぞ仕事はありましたか」

「近頃、何もありませんね。口が干し上がってどうしようもない」

「この暑さでは、どこもがうんざりしていますからね」

「暑気払いに一杯といきたいが、あいにく銭の持ちあわせもない。またにしましょうか」

しばらく雑談した磐音は柳次郎に分かれを告げると、深川六間堀の金兵衛長屋に戻った。

九尺二間の長屋には温気が充満していた。

磐音は狭い裏庭の障子を開けると風を入れた。

水甕を除き、米櫃を確かめた。

かさりと底に残っているだけだ。

「なんとかしなければ」

独り言を呟きながら、残った米を釜に移した。井戸端に持って行こうと立ち上がったとき、戸口に誰かがった気配がした。

顔を上げると、富岡八幡宮前で金貸しとやくざを二枚看板にした権造一家の代貸の五郎造と視線が合った。

「五郎造どのか、暑いな」

「親分かお呼びだぜ」

「そういえば親分には借りがあったな」

「覚えていたとは殊勝なこった」

五郎造がにやりと笑った。

「暫し待ってはもらえぬか。腹が減って戦はできぬと申すでな」

「ちぇっ。このくそ暑いのに、大の男が飯を炊くのを待てるけえ。飯ぐれえ、うちに来ればたらふく食わせてやるぜ」

「きょうか。仕度をいたすゆえ、しばらく門前でお待ちあれ」

「おめえさんと話してると日が暮れるぜ。早くしねえ」

磐音は五郎造を待たせ、備前包平二尺七寸と無銘の脇差一尺七寸三分を腰に差し落とした。それで仕度はできた。

六間堀町から富岡八幡宮まで五郎蔵と肩を並べて歩きながら、磐音は訊いた。

「親分の頼みごとはなにかな」

ひと月前、鰻捕りの幸吉が泥龜の米次に拐かされたことがあった。

そのとき、権造親分の手を借りて幸吉の行方を探したのだ。その返礼に、磐音は一度だけ剣の腕を貸す約束をしていた。

その取り立てに五郎造がきたのだ。

「おめえさんは深川不動が知っているけえ」

「前を通ったことはあるが、参拝したことはござらぬ」

「ござらぬときたか。あそこはうちの稼ぎ場だ」

深川不動は、元禄十六年に成田山が永代寺の門前を借りて、不動尊の出開帳をした時に始まる。以来しばしば、成田山新勝寺をはじめ、出開帳で人を集めていた。単に不動堂とも呼ばれて、地元の者に親しまれていた。

「深川不動の夏祭りは、うちの親分と川向うは浅草黒船町の勝八親分が交互に仕切る習わしになっていた。ところが、つい２日前、深川不動に打ち合わせに行ったと思いねえ。するとよ、顎の勝八の所から子分どもが来て、相談は済んだというじゃねえか。なんて話だってんで、親分とおれと黒船町に乗り込んだってわけだ。すると顎の野郎め、今年の夏祭りが深川不動はうちで仕切らせてもらうぜって、ふざけたことを抜かしやがる。親分が怒りなさって、顎、てめえはおれに喧嘩を売る気かと怒鳴りなさったが、顎の野郎、平気の平座でよ。ああ、そういうことだってぬかしやがったのさ。おれも親分も腸が煮えくりかえったが、浪人者まで出てきやがって、多勢に無勢だ。そんときは堪えに堪えて橋を渡って戻ってきたってわけだ。売られた喧嘩だ、こっちも人手を集めて出入りの仕度を始めた。ところが、昨日のことだ、うちの関わりの櫓下の女郎屋に五人の浪人者が上がって、遊女を揚げて盛大に飲み食いしたあげく、朝方、勘定が欲しければ顎の勝八親分に請求しろといったというじゃねえか。そいつを聞いた親分がかんかんに怒りなさってよ、子分を差し向けたと思いねえ。ところが浪人どもは腕に覚えがある野郎どもで、散々な目に遭わされてよ、四人が手足に怪我をして、医者の所に担ぎこまれたってわけだ。」

話の目処（めど）がついた頃、磐音と五郎造は、富岡八幡宮前の権造一家の戸口の前に辿り着いていた。

一家は殺伐とした重い空気に囲まれていた。奥座敷には喧嘩仕度の子分たちが控えている気配だ。

磐音は始めて権造の居間に通された。

多きな神棚の前の長火鉢には、派手な浴衣の権造がでんと座り、苦虫を噛み潰したような顔で磐音を迎えた。

「おめえさんに貸しがあったな」

「五郎造どのにも同じことを言われた。親分、念を押すまでもない」

「話は聞いたか」

「浪人五人にただで飲み食いされたようだな」

「飲み食いばかりか、子分四人が使いものにならねえ。金もさることながら、おれの面子が立たねえや。このままじゃあ、稼業にも差し障りがあらあ」

「顎の親分とはこれまで仲良くやってきたと聞いたが、急に何が起こったのかな」

「そこだ。顎の勝八は元々黒船町の先代の代貸だった男だが、先代が去年の暮れに急死しなすったあと、姉さんを誑し込んでよ、跡目を継いだんだ。先代は仲間とも町奉行所ともうまくやっていたもんで、顎の野郎には北町の臨時廻り同心がついていやがる。定廻り同心を長年務めた月形彦九郎という男だ。こいつは寺社方とも仲がいい。こいつの力を借りて、顎の野郎は川のこっちにも縄張りを広げてきてやがるんでえ」

「親分、顎の一家には何人も浪人者がいるという話ではないか。そいつらも月形どのの手下かな」

「浪人の頭領は、深甚流とかいう剣術の達人飯岡一郎助でよ、顎一家の近くに町道場を開いている三十五、六の大男だ。こいつの所に食い詰め浪人がごろごろしてるのさ。うちの関わりの見世で飲み食いしやがったのもこいつらだ」

「浪人どもは別にして、北町の同心どのが厄介だな」

「なんぞ知恵を働かせてくれ。おめえには貸しがあるんだからな」

「親分、そう何度も貸し貸しと言わんでもらいたい。それがしもこうして顔を出しておるのだ。十分、相談には乗るつもりだ」

言わねは考える素振りを見せた。

「親分、北町同心の始末はそれがしにまかせてくれ。少々時間が架かるやもしれぬがな」

「おめえさん、安請け合いしていいのけえ」

言わねには考えがあった。だが、そう易易と権造に話すつもりはない。腹をすかせた仲間がほかに二人もいるのだ。

「今年の夏祭りはなんとしてもうちで仕切る。祭りまでには３日をきってるが、それまでには決着をつけてえ」

「まかせてもらおう。まずは深甚流の用心棒の退治から取りかかろうか。その前に二つばかり相談だ。いささか腕に覚えがあっても、大勢の浪人相手に某一人で獅子奮迅の働きはできぬ。そこで二人ばかり助太刀を頼もうと思うが、よいかな」

「二人だと。仕方あるめえ」

「某はただ働きでかまわぬが、助太刀を頼む以上、仲間はそうはいくまい」

「仕方あるめえ、二人は一日一両でどうだ」

「今一つ、それがし、腹をすかせておる。飯を馳走してくれぬか」

「呆れた野郎だぜ。五郎造、台所でなんぞ食わせてやれ」

そう命じた権造はどこかほっと安堵の色を見せた。

蛸のさくら煮、牛蒡、人参、蒟蒻、椎茸などの野菜と、鶏を炊き合わせたものなど、金貸しとやくざの稼業はなかなかの繁盛とみえる。

「おまえさん、よく食うな」

満足げな表情で茶を飲む磐音を見て、中年の勝手女中のおかつがびっくりした顔で行言った。

「味付けが実に結構でござった。母上の料理とよく似ておりました」

女中は笑みを浮かべた。

「おまえさんのおっ母さんはどこにおられるだね」

「江戸から二百六十余里も離れた西国でござる」

「江戸で腹を減らしてると知れば、心配もされようが。おまえさんも、ちったあ性根を入れて働かねばなんねえぞ」

女中は磐音に説教を垂れた。

「そうじゃな、いつまでも心配をかけてはならぬな」

磐音は真剣にそう思った。

「おめえさん、いつまで台所に座り込んでいるつもりでえ。飯を食った分だけ働きやがれ」

五郎造が台所に顔を出して怒鳴った。

「そろそろ神輿を上げようと思っていたところだ。まずは人集めに参る。今夜からこの家に泊まることになるが、それでようか」

「親分もその気でいなさる。仲間を連れて夕刻までには戻ってきてくんな。またこの前みてえに、顎一家の浪人どもに好き放題飲み食いされねえとも限らねえからな」

五郎造は磐音を頼りにしているように言った。

「五郎造どの、任せておいてくれ。その代わり、飯だけは昼のように存分に頼む」

「なんて情けねえ侍でえ」

五郎造は舌打ちした。それでも、

「早く行ってくんな」

と送り出した。

磐音は今朝ほど訪ねたばかりの北割下水に、再び品川柳次郎を訪ねた。すると、柳次郎派井戸端で裾をからげて洗濯をしていた。

盥は汚れ物で溢れている

「精が出ますか」

「母上の手伝いですよ」

品川柳次郎が苦笑いし、

「坂崎さんが二度もうちに顔を出すとは、仕事が見つかりましたか」

と期待に満ちた顔をした。

「富岡八幡宮前でやくざと金貸しを兼業する親分の用心棒の口がありました。一日二分、三度三度の飯付きです。やりますか」

「もちろんやります。母上の手伝いをしたからとて一文にもなりませんからね。用意する間、しばらく待ってください」

壊れかけた門前で磐音が待っていると、柳次郎の母上の幾代が顔を出した。まくわ瓜を一切れ載せた皿を手にしていた。

「柳次郎がいつもお世話になります」

磐音は慌てた。未だちゃんとした挨拶をしたことがなかった。

「こちらこそ世話になっております。それがし、六間堀の金兵衛長屋に住まいいなす坂崎磐音と申す者にございます」

「お話は柳次郎から伺っていますよ」

磐音はふと、年格好が同じくらいの故郷の母を思い出した。

「こんなものしかいありませんがよう冷えております。お食べなさい」

「頂戴します」

富岡八幡宮から急いで来た磐音には、冷たく冷やされたまくわうりがなんとも美味だった。

「お待たせしました」

よれよれの単衣の着流しに大小を落とし差しにした品川柳次郎が出てきて、

「瓜を食わされましたか。庭で穫ったものであまり甘くはないでしょう」

とわらった。そして幾代に、

「母上、坂崎さんが仕事を持って参られた。首尾よくいったらなんぞ美味しいものでも買うて戻りますぞ」

と言い残すと磐音を誘って門を出た。

二人の足を南割下水吉岡町のどんづまりに住む竹村武左衛門の半欠け長屋に向かった。貧乏御家人や食い詰め浪人らが多く住むその一帯は、本所深川界隈でも一段とひどい場所だ。

夏の季節、縦横に走る溝は乾ききって、ぼうふらが湧水もない、ただ埃っぽい家並みが黄ばんだ洗濯物の間に広がり、むうっとした湿気と饐えた臭いが立ち込めていた。

「竹村さん、仕事だぞ」

武左衛門が出てくる前に、長女の早苗と長男の修太郎が飛び出してきた。

「ああ、良かった。父上と母上は数日前んい喧嘩して以来、口も利かれないのです。これで仲直りができそうです」

母親の勢津が乱れた髪を気にしながら出てきて、

「これ、早苗、うちの恥を他人様に大声で話すものではありません」

と制止したがもはや遅い。

「勢津どの、仲直りができそうな仕事の口を坂崎さんが見つけてこられた。もうしばらくの辛抱です。二、三日待ってください。」

竹村武左衛門が塗の剥げた刀を手に姿を見せ、

「待たせたな」

「行き先は富岡八幡宮です」

「唐天竺でも参るぞ」

とほっとした顔を見せた。

本来、南割下水とは旗本諸家が屋敷を連ねる一帯である。ところが武左衛門の住む吉岡町は、南割下水とは名ばかりの極貧のものたちが住む一角だ。町内を抜けると武左衛門は大きな溜息をついた。

「勢津どのとの喧嘩は金のことですか」

「ほかになにがある」

武左衛門は柳次郎に突っかかるように言い、慌てて取り繕った。

「すまぬ。家内の揉め事でつい気が立ってしまった。坂崎さん、仕事とはどんな類かな」

磐音は権造一家に降りかかった難儀について話て聞かせた。

「ちょっと待った。坂崎さんはただ働きか」

「借りがあるので仕方がありません。そのうちよいこともあるでしょう」

「坂崎さんらしい話だが、ただ働きはしんどいな」

「坂崎さんも柳次郎も考えが足りぬな。それがしの見立てでは、やりようによっては銭になる話だ。坂崎さんとて、権造に借り分以上の義理はあるまい」

「幸吉の行方を探し出してくれた借りを返せばいいだけですが、相手が北町奉行所の臨時廻り同心ともなると厄介ですよ」

「そっちは坂崎さんの知恵の絞りどころだ。それがしが言うのは、顎の勝八と権造親分をうまく操る事ができれば、それなりの金になるということだ。」

「竹村の旦那、坂崎さんの性格を考えてみろよ、小さいとはいえ借りは借りだ。それを裏切って顎の勝八に寝返るなんてできっこないさ」

「それがしは裏切れなんて言ってないぞ。二つの争いの間隙を衝けば金が転がり込むと言っているだけだ」

「そいつに期待しよう」

品川柳次郎がその話題に蓋をするように言った。

「深甚流の飯岡一郎助について、お二人は何ぞご存じないですか」

あると答えたのは竹村武左衛門だ。

「深甚流は元々、加賀の百姓の子である草深四郎が始めた剣法でな、塚原卜伝に新当流を習って深甚流天狗小太刀の開祖になったそうな。加賀に中条流が入る以前は深甚流が加賀のお家流だったというぞ。飯岡一郎助は、この深甚流直系を名乗っている男でな、六尺二十貫を超える巨漢だ。それがしが一度黒船町を通りかかった折りに道場を覗いたことがある。利き腕の右手に四尺余りの木刀、左手に二尺余りの小太刀を持って稽古する様は、まさに仁王か阿修羅の形相でな、なかなかの腕前とみた。それに顔が鬼瓦のように物凄くてな、まあ、闇夜には会いたくない御仁だな」

「一度拝見するとしよう」

と磐音が答えた時に、三人は富岡八幡宮前の権造親分の家の前に辿り着いた。すると玄関が騒がしい。

「おおっ、帰ってきたか」

五郎造が声を上げた。玄関先に露天商の男たちが六、七人いて、権造に何か訴えていた。

「いいとこに帰ってきたぜ。こいつらはよ、本所深川一帯で祭りを追って商いをする香具師の連中だ。不動堂でも見世を春ことになっているんだが、顎の勝八のところから回状がきたそうだ」

権造親分は手にしていた回状を、ふざけた話だぜと言いながら磐音に渡した。

磐音は書状を広げた。達筆である。

通告状

この度、本所深川一帯の神仏閣についての祭礼仕切りは浅草黒船町の顎の勝八の仕切るところになりし事、お呼びこの一件、北町奉行所臨時廻り同心月形彦九郎様お許しの旨、通告致し候。

この変更に伴い、

1. 露天商いのショバ代一祭礼につき一店一日一分、半金前納の事
2. ショバ割は三日前の昼前、祭礼地にて挙行決定の事

右通告致し候

「ふざけた真似をしやがって、このおれの面を踏みつけにするにもほどがあらあ。旦那方よ、ショバ代は昔から一日二百文ときまってるんだ。そいつを一気に五倍にねあげたあ、一体全体どういうこった」

権造が顔を真赤にして怒鳴った。

「親分、われらに怒った所で致し方あるまい。どうせよと言われるのかな」

「こいつらはおれに、顎に掛けあって元に戻してくれといっていやがるんだ。どうしたもんか」

権造も思案に暮れた表情だ。

「親分、ここは一番、親分自身が貫禄をみせて、顎の勝八に直々に掛け合うしかあるまい」

「おれがいきなり面ぁ出すのけえ」

金貸しの権造は尻込みした。

「親分、顎の親分の顔も見ておきたいでな、それがしも同道しよう。それに香具師の方々も何人かご一緒願おうか」

「親分、わしらもですかい」

露天商たちも怯えた顔をした。

「そなたらに宛てた回状ではないか。当人が持参せずば名目が立つまい。なあに、そなたらニケがをさせるようなことはさせぬ」

磐音が請け合い、香具師たちが額を寄せて話し合った末に、二人が代表で出向くことに決まった。となれば、金貸しの権造も出張らないわけにはいかない。

「五郎造、猪牙舟を用意しな」

と命じた。

二

７つ、富岡八幡宮から猪牙舟に乗ったのは、船頭のほかに、金貸しの権造親分、香具師の飴細工の富吉、竹笊売りの勘太郎、それに坂崎磐音の四人だ。

権造は、

「おめえさん一人で大丈夫けえ」

と心配したが、

「今日は掛け合いで喧嘩ではあるまい。多勢で押しかければかえって、騒ぎが大きくなろう」

と、磐音一人が同行することにしたのだ。

夏の日はまだ、雲ひとつない空高くにあった。が、水面を吹き渡る風には涼気があって気持ちがよかった。

舟は蓬莱橋、黒船橋、三蔵橋、武家方一石橋と潜って、大川に出た。河口近くから永代橋、新大橋、両国橋と、流れに浮かぶ橋を見ながら、御厩河岸の渡しの先で浅草黒船町の河岸に着けた。

船頭を船に残して、四人はようやく日が翳り始めた町に上がった。顎の勝八一家は、お米蔵から浅草に抜ける浅草お蔵前通り沿いの、間口八間ほどの堂々とした構えであった。障子戸には、

金竜山浅草寺御用黒船勝八

とあった。

「ごめん」

さすがは一家のかしら、金貸しの権造だ。顎一家の前までくると背筋を伸ばして、敷居を跨いだ。玄関先の上がりかまちにいた子分が慌てて奥に走り込んでいった。

「金貸しがまた何の用でえ」

顎の勝八が貫禄を見せて玄関先に出てきた。

ひょろりとした痩身に長い顔が乗っていた。さらに異名の顎が、茄子のように曲がって顔の前に突き出していた。

「何の用とは挨拶だな、勝八。おめえの用心棒どもがうちの関わりの店で飲み食いした付けの取り立てに来たんでえ。女郎の揚げ代と合わせ、締めて十両と二分三朱、そっくり耳を揃えて払ってもらおうかい」

顎の勝八が笑い出した。すると痩せた体がカタカタと鳴った。

「おめえ、暑さに頭をやられたか。おれの用心棒がどこで飲み食いしようと、おれが払ういわれはねえや。日が高いうちに川を渡って、櫓下に戻るこったぜ。金貸しの権造さんよ、うちにゃ、気が荒れえ者が手ぐすね引いて待ってるんだ」

「そうか、それならそれでこいつはいったん置いといて別口にかかろうか。富吉、勘太郎、入ってこい」

権造が表に向かって叫ぶと、磐音に背を押された二人がおずおずと入ってきた。

続いて磐音も従った。

「なんでえ、てめえら。話し合いなら祭りの場でと命じてあるぜ」

顎の子分の一人が叫んだ。

「そいつをな、断りに来たんだよ」

「その付き合いが金貸したあ、気の毒なこったぜ。おめえら、足腰を叩き折られねえうちに出ていきな。今日の所は見逃してやらあ」

顎の勝八がじろりと睨んだ。

富吉と勘太郎が顔を伏せた。

「野郎ども、叩きだせ」

顎の勝八の命に、子分太刀が懐の合口や長脇差を抜きながら、金貸しの権造や露天商太刀に詰め寄ってきた。

富吉と勘太郎がなにか叫びながら、外に飛び出そうとした。

その背後から磐音がゆっくりと顔を見せた。

「顎の親分、今日は話し合いに参った。乱暴はいかんぞ」

「金貸しの野郎、落ち着いてやがると思ったら、浪人を一匹連れてきたか。ままうこっちゃねえ。こいつも叩きだせ。」

子分の一人が合口を腰にぴたりと付けて、何の気配も見せず、磐音の腹めがけて切っ先を突き入れてきた。

磐音が体を開いた。

実にのんびりした動きのように見えたが、きらめく合口の切っ先との間合いっを読みきって体を開き、合口を握った手首を掴むと瞬時に捻り上げていた。

子分の体が虚空に舞って土間に叩きつけられた。

「ううう」

唸り声を揚げて子分は気を失った。

「軍蔵、道場の先生を呼んでこい」

子分の一人画素とに飛び出した。

深甚流の道場主飯岡一郎助を呼びに行ったのであろう。

その間に、残った子分たちが磐音を囲んだ。

磐音は土間の中央に歩を進めた。

「顎の親分、さっきも言ったが、喧嘩に参ったのではない。権造親分は話し合いに来たのだ。親分同士、仲良く深川不動の祭りを取り仕切れぬか」

「てめえら、さんびんが能書き垂れるのを突っ立って聞いてるばかりか」

顎が怒鳴ると痩せた体がまたカタカタと鳴った。

「親分、あっしが始末をつけてやりまさあ」

俊敏そうな若い衆が長脇差を翳して、縁日の夜店でも見物する日のようなのどかな風情で佇む磐音の眉間に切りつけてきた。

再び春風が舞った。

実に長閑な動きに見えた。

だが、磐音は長脇差の下に入り込むと、相手の腕を抱え、片膝の上に体をのせて跳ね上げていた。

見事に宙を舞った若い衆が、これまた土間に叩きつけられた。

磐音の左手に長脇差が残っていた。

「うっふっふっふ」

金貸しのごんぞうが嬉しそうに笑った。

「くそっ」

新手が二人がかりで磐音に襲いかかってきた。

磐音が長脇差を見ねに返して右に左に片手で振った。すると長脇差やら合口が宙に飛び、その上、子分たちは肩や脇腹を抑えて土間に転がった。

神田三崎町の直心影流の佐々木玲圓道場でもう稽古を積み、目録を得た磐音だ。

佐々木道場の目録はほかの道場の免許皆伝に匹敵する、といわれる佐々木道場で三年の修業を積んだ後、磐音は運命に翻弄されて親友と立ち合う羽目に陥り、修羅場を体験してもいた。

豊後関前藩暇乞いして江戸に出てくると、見過ぎ世過ぎを剣に頼って生き抜いてきたのだ。わずか一年の間に幾多の修羅場を潜り抜け、師匠の佐々木玲圓に驚愕される腕前になっていた。

腕自慢のやくざが太刀打ちできる相手ではない。

「ちくしょう」

と顎が舌打ちしたとき、

「親分、道場のっ先生方を連れて来やしたぜ」

という声がして、見るからに怪しげな浪人が四人飛び込んできた。

「橡さん、先生はどうした」

「飯岡一郎助どのが所要でおられぬ。なあに浪人の一人や二人、われらで十分でござる」

橡と呼ばれた剣客が四人の頭分と思えた。

色黒の顔に無精髭を生やし、汚れた袖からにゅっと出た腕は、丸太のように太かった。背丈は五尺四寸ばかり、胸板も厚く、猪首の男だ。年格好は、三十五、六か。

「橡どの、それがしは喧嘩に参ったのではない」

磐音がのんびりした声で言った。

「ふざけたことをぬかすな。土間に転がっているのはなんだ。おまえがやっておいて、喧嘩に来たのではないとぬかすか」

「これは相済まぬことをした。勢いでな、こうなった」

「流儀と名を聞いておこうか」

「神田三崎町の佐々木先生のもとで三年ばかり稽古を積んだ、坂崎磐音と申す者でござる。以後、よしなに。」

「直心影流か。面白い、腕前を見てつかわす」

「そなたはなんと申される」

磐音の気はあくまで長閑に響いた。

「橡陣十郎、神伝流免許皆伝だ」

正式には奥山理想神伝流という。祖は堀丹波守直央が興した流儀ということしか磐音には分からなかった。

「免許皆伝とはなかなかの腕前でござるな」

橡が草履を跳ね飛ばすように後ろに脱ぎ捨てた。

朱鞘の剣を抜いた。すると仲間の三人が橡を援護するように刀を抜き連れて橡の左右に展開した。

橡は身幅の厚い剣を八双に構えた。

磐音は手にしていた長脇差を捨てた。

国許を出る時に屋敷から持ちだした伝来の備前包平二尺七寸をそろりと抜いた。

正眼に、静かにつけた。

橡が、

（なんだ）

という表情を見せた。

国許の剣の師匠中戸信継が、

「…春先の縁側で日向ぼっこをしている年寄り猫のようじゃ。眠っているのか起きているのか、まるで手応えがない。こちらもつい手を出すのを忘れてしまう。居眠り磐音の居眠り剣法じゃな」

と評した構えを橡は侮ったようだ。

八双の剣の切っ先を上下に揺らして間をとっていた橡陣十郎の双眸が充血したように地走り、細くなった。

磐音は不動のままだ。

「おおっ！」

橡が絶叫するのに呼応して動いたのは、橡の右手に控えていた小柄な浪人だ。

背を丸めて、中段の剣を下から伸ばし上げるように磐音の喉元に突きを入れてきた。

春風駘蕩の磐音が豹変したのはまさにこの瞬間だ。

包平を手元に引き寄せるとその反動を利して前方に送った。

突きの襲撃に擦り合わせて、

ピーン

と弾き返した。同時に包平が峰に返されて、小柄なけんしの下半身をしたたかに叩いていた。

ぼきり！

という不気味な音がおご一家の玄関先に響いて、壁板に体をぶつけた相手が倒れこんだ。

橡陣十郎が八双の剣を磐音に叩きつけてきた。

神伝流の免許皆伝と自ら誇るだけに、刃風鋭く磐音を襲ってきた。

磐音は虚空に跳ね上げていた包平を上から橡の八双に合わせた。

それは音もなく真綿で包まれたようだった。

橡はそれでも包平から剣を引くと、磐音の首筋に二の手を送った。

磐音は悠然と合わせた。合わせながらう脱ぎの動きを読んでいた。

ｓれが橡を苛立たせた。

「おのれ！」

橡陣十郎はしゃにむに連続攻撃を磐音に送り込む。

そのことごとくが手応えもなく絡めとられ、押し返された。

磐音は援護に回った二人の動きに注意しながら、橡と対決していた。

二人は磐音の後方に回り込もうとしたが、複数の者が剣を振り回すには狭すぎる屋内と、磐音が微妙に位置をかえる動きについていけないでいた。

「何をしておるのだ！」

橡は仲間に怒鳴ると自ら間合いを外した。

荒い息を肩でつきながら、

「こやつ、鵺のような男だ。一気に押し包んで始末するぞ。」

と仲間の二人に命じた。

「権造親分、どうしたものかな」

磐音が権造に声をかけた。

「旦那、顎の用心棒は三下奴だ。いつまでも遊んでねえでそろそろ決着をつけなせえ」

権造のけに余裕が出てきた。

「そうだったな。今日は掛け合いにきただけだ。手間を取っては退屈か」

橡らが決死の態勢で磐音を囲んだ。

中央に橡陣十郎が、右手に長身の若い浪人、左が小太りの壮年の男だ。

磐音は再び峰に返した包平を正眼に戻した。

間合いは互いの切っ先が一尺余り、手を伸ばせば包平の切っ先が橡の切っ先に触れるほどだ。

橡は弾む息遣いを鎮めた。

修羅場をくぐり抜けてきた古強者だけがなしうる技だ。

三人が阿吽の呼吸で磐音への攻撃を確かめ合った。

磐音は受けの剣を捨てた。

正眼の剣が動きの気配さえ見せずに仕掛けた。

突如、疾風が顎一家の玄関先に巻き起こった。

左に一気に飛ぶと、小太りの剣士の肩口を刎ねるように叩いた。

橡が迅速に対応して、磐音お胴を抜こうとした。

磐音はすでに包平を手元に引きつけて、相手の抜き胴に胴打ちで応じていた。

のんびりとした剣風が一変し、熱い風が舞起こって、橡のあばら骨をぼきりと響かせて数本へし折っていた。

二人が同時に土間に転がった。

残る長身の浪人は、一瞬の間に倒された雷撃の攻撃に怯えながらも突っ込んできた。

磐音は再び居眠り猫に戻って、相手を手元まで引き寄せ、剣を絡め落としていた。

「今日は挨拶にござれば、これまで。引き上げなされ！」

凛然とした磐音の声に、空手で立ち尽くしていた浪人が橡らを連れて外に転がり逃げた。

「顎、おめえの用心棒はあんなふうで大丈夫かえ」

金貸しの権造の声もどこか晴れやかだ。

磐音は権造が書き付けを上がりかまちに置くのを見ながら包平を鞘に戻した。

「親分、こちらの用心棒どのの狼藉で子分の方が怪我を負ったのであったな。顎の親分は治療代も持つと言うておられるぞ。なあ、顎の勝八どの」

「おおっ、いいところに気が付きなさった。顎もこれでなかなか物分りのいい男でな。飲み食いの代金十両二分三朱と合わせて切り餅一つももらっていこうか」

権造が上がり框に書き付けを放り投げた。

顎の勝八は悔しそうな顔で奥に自慢の顎をしゃくりあげた。

奥から派手な芝居柄の浴衣をぞろりと着た年増女が姿を見せて、顎に突き出した。

「おや、これは先代の姐さん、元気そうで何よりだ。先代はできたお人だったねえ。姐さんも顎なんぞにくっついていなさるとろくなことはねえよ」

と女の手から二十五両をひったくった金貸しの権造が、

「念には及ぶめえが深川不動の夏祭りは例年通りうちが仕切るぜ。それと香具師のショバ代はいつもどおりにしてくんな。貧乏人が泣きを見る世の中じゃあ、いけねえからな。邪魔したな、顎の勝八」

捨て台詞まで残した金貸しの権造が気分よく顎一家の玄関を出た。

磐音も顎の親分に会釈すると権造に従った。

「おめえさん、おれが見込んだだけのことはあらあ」

日が沈んで涼しくなった大川を渡る猪牙舟の上で、金貸しの権造は満足そうに磐音に言い、

「今日はおめえさんの機転でよ、顎の鼻を明かした。こいつは、小遣いだ」

と二両くれた。

「ありがたい。このところ、米も味噌もきらして、家賃も溜めておった。これでなんとか暮らしが立ちゆく」

「おめえさんは奇妙な侍だ。鰻捕りの餓鬼を助けるために命を張るかと思えば、律儀におれの借りを返してもくれる。育ちがいいのか、それとも人がいいだけなのか」

「親分、約定は約定ですからね」

「本当に変わった侍だぜ」

権造がまた呆れた。

「親分、それがしのことより顎一家の出方だ。これで黙って引っ込むとも思えん」

「そこよ、ひと悶着あるだろうな。まずは深川不動の夏祭りが山になろうぜ」

「われら三人が交代で親分の家に泊まるゆえ、心配はいらぬ」

猪牙舟は櫓下の堀へと入っていった。すでにとっぷりと日が暮れていた。

富岡八幡宮前の船着場は四人は降りた。

香具師の富吉と勘太郎が二人にぺこぺこと頭を下げて、家に戻っていった。

権造一家では赤々と篝火を焚いて、喧嘩仕度で権造らの帰りを待っていた。

「あっ、親分のお帰りだ！」

子分の一人が気付いた叫んだ。すると代貸の五郎造を先頭にどっと玄関先に姿を見せた。

品川柳次郎も竹村武左衛門も刀を手に出てきた。

「喧嘩仕度は当分なしだ。この浪人さんが顎の用心棒を四人ばかり叩き伏せたからよ。顎の野郎、目の玉でんぐり返して驚いてたぜ。飲み食いの代金から治療代までふんだくってきた。こういうのを溜飲が下がるというだろうな」

金貸しの権造が満足気に今に引き上げ、五郎造が磐音に、

「ご苦労だったな」

と労った。

「五郎造どの、いささか腹が減った。夕餉を頼む」

「おめえさんの仲間も食べずに帰りを待ってたぜ」

「それはすまぬことをしたな」

五郎造に案内されるように台所に行くと、板の間に箱膳が３つ並び、酒まで添えられていた。

「こういう時期だ、酔っ払うまで飲んじゃいけねえぜ」

念を押す五郎造の声もなんとなく優しく聞こえた。

「お待たせしました」

「首尾がうまく言ったようですね」

柳次郎が訊いた。

「火種は十分残っていますから、深川不動の祭りの日までは働けるでしょう」

「しめた、二両になるな」

と素早く計算した武左衛門が呟く。

「ともかく、当分三人で寝泊まりすることになるでしょう」

「相分かった」

竹武左衛門が待ち遠しいという顔で相槌を打ち、徳利を手にした。

膳には鯖の焼き物、煮しめ、おからと野菜の炒り煮、具だくさんの汁、それに一夜漬けの胡瓜が並んでいた。

「これは馳走だ。だが酒より飯だ。」

磐音は自分の徳利を武左衛門に渡し。

「よいのか、坂崎さん。おれも柳次郎も今日何もしていないぞ」

「そのうちお二人が働くおりもありますよ」

磐音は夕餉を食べ始めた。すると誰かが声をかけても上の空、いや、飯をたべることに没頭して赤子のような顔に変わった。